

# 一六世紀後期の京都大徳寺の帳簿史料からみた金・銀・米・銭の流通と機能

田中浩司

The Distribution and Function of Gold, Silver, Rice and Copper Coins as Represented in the Accounts of Daitoku-ji Temple in Kyoto from late 16th Century

はじめに

- ①元亀三年の大徳寺并諸塔頭金銀米錢出米納下帳の性格
- ②「出米納下帳」の構造
- ③「出米納下帳」の下行分
- ④「出米納下帳」にみえる金・銀の流通と存在形態  
おわりに

## [譜文解説]

本稿は、元亀三年（一五七二）の大徳寺并諸塔頭金銀米錢出米納下帳の分析を通じて、当該期の京都における金・銀・米・銭の貨幣としての機能と流通について検討するものである。通説的な理解では、一六世紀、撰錢令にみられる錢の信用低下、中期における金・銀の増産・普及などが指摘されてきた。しかしながら、一六世紀前期段階、京都の真珠庵ではすでにある程度の量の金を入手しており、一六世紀後期の貨幣の態様についても再検討すべき課題が少なくない。

①では、上記の史料が、織田信長などに徳政免除の安堵の礼銀などを贈るために作成されたものであることを明らかにした。

②では、史料の構造、とくに収入分について分析を行なった。そこから、大徳寺および塔頭・寺僧らが買得し、所領していた賀茂社境内からの拠出米が主要な収入となつてることを指摘し、金・銀については、そのほとんどが大徳寺の方丈などからの借入によつていたことを明らかにした。

③では、支出項目の分析から、その金・銀・米・銭の機能（使途）について検討した。米は汎用性のある貨幣となつていることが明らかとなつた。錢の使用は、非常に限定的なものになつていていた。金・銀・米・銭は、相互に両替可能な段階にあり、金・銀も財産や贈答品から支払手段へと機能を拡大していたことを指摘した。

④では、当時の金・銀がもつていた流通上の問題点について論じた。当時の金・銀は、品位・形状などが不統一で、交換に際して、精製・整形の手数料や切斷の際の欠損などの「コスト」がかかっていたことが判明した。それが当時の貨幣としての金・銀の流通、普及を阻害していたことを指摘した。

以上により、元亀三年（一五七二）段階の京都における、錢の使用の衰退、米の貨幣としての重要性の増大、金・銀の使用の拡大とそれにかかる問題点など、金・銀・米・銭、各々の貨幣としての位置付けを解明したものである。